

第三十二回

オールセーム？

ある日、ニュージールランド兵が突然

「ウオー、フィッシュ」

と口走った。

「えろ！どっちが勝ったんだ？停戦か？」

と聞けば、

「オールセーム」

というだけで要領をえない。「すべて同じ」、なにが同じなのかさっぱり意味が飲み込めなかった。

はじめのうちは分からなかったが、收容所側は日本人が敗戦を知れば何をしてくるか分からないので、嚴重に口止めを言い渡されていたらしかた。戦争は終わったのだ。

一九四五年（昭和二十年）十二月二十八日頃、この捕虜收容所のニュージールランド側から正式な司令が日本側へ知らされた。何日までに身の回りの整理をするようにとの帰還通達が届けられた。班員が通達を囲んで見た。噂はやはり本当だったのだという思いと、いや、そう言っておいてどこか入連れて行く口実ではないかと、全員半信半疑だった。

現地の人たちと仲良くなった者で、こちらへ残ると言い出す何人かの兵隊もいた。が、そういう者たちも、一旦日本へ帰ってから出直すようにと説得され、いそぎ帰還準備に入った。

半信疑いながら、やはり待ちに待った日本へ帰還できる期待とで、キャンツ内はどの部屋も歡びにあふれた。

帰るのに「こんなものを持っている」と取り上げられるとか何や、かやと声高に笑い声が飛び交った。ニュージールランド貨幣や收容所内通用のお金をすいぶん溜め込んだ者もいたが、持ち帰っても仕方がない。自分が働いて稼いだものをニュージールランド人にただやっしまつのも残念だ、と、いつて土へ埋めた変わり者もいた。

これまでに作った細工物も惜しかったが、自分の痕跡を残すのがいやさに、夜あかあかと燃える焚き火にくべて灰にしてしまった。

収容所を出るときに、ユージーランド兵の驚く顔が見たいと、全員が隠し持っていた長い刃物を、小屋の中へ入りと並べて置いてきた。さぞ驚いたことだろうとおもう。

私の貯金残高は二ポンド以上になっていた。日本銀行へ持っていけば日本円に換えられるといわれ小切手を貰った。この時は信じられなかったが、とにかく貰って帰ってきたような気がするが、そのあとの記憶がまぶたかない。

このエザーストン捕虜収容所に入ったのは一九四二年(昭和十七年)十二月であったが、出所したのはそれから丸三年たった、奇しくも十二月であった。

つづく

次回第三十三回は七月二十日(火)の予定